

が仔細に論證したる所なり、偕て此の地の鎮將康拂耽延なる名につきて考ふるに、康は Pelliot 氏の論證にも見ゆるが如く、勿論ソグド人なるを示せるものなるが、拂耽延は思ふに佛祖統記に則天武后の延載元年（六九四年）二宗教の偽經を持ちて來朝せりと記さるゝ拂多誕、即ち Gauthiot 氏によれば摩尼教僧侶の稱號の一にして、Fursta-dan（宗義を知る人）なる語に當ると説かるゝものと同語に外ならざるべし、「耽」は唐代に外國音を寫す場合に「多」と相通じて用ゐられたること明らかにして、唐書薛延陀傳に、夷男の子拔酌の可汗としての徽號を、頡利俱利失薛沙多彌と記せるに、同じ人を冊府元龜^{卷九}封冊篇には、沙耽彌葉護拔酌と記せり、沙多彌も沙耽彌も共にトルコ語の *istami* を寫したるものにして、多も耽も同一なる *sa* の音に應ぜしめたるものなり、又誕は今音 *tan* にして延は *yen* なれども古くは延に *tan* の音ありたるべきは、曾て Hirth 氏が論じたるが如く唵誕唵誕等延を音基とせる文字が、皆 *tan* の音を有するよりしても推知し得べく、𑖅字の如きも亦此の例に屬す、されば拂耽延が拂多誕と同語なることは疑無き所なりとす、果して然らば康拂耽延といふものは、當時石城鎮に植民せし康國人の首領にして、Fursta-dan なる稱號を有せし摩尼教の僧侶なりしこと亦疑無く、從て此の地のソグド人が、支那に摩尼教の傳はりしより以前に於て、既に其の教を奉じたりしものなることも亦推察に餘あるべし、抑もソグド人は獨り此の石城鎮のみならず、東方の諸地方に植民したりしものにして、Pelliot 氏の論ずるが如く、早くより吐魯番地方に於ても、アルタイ地方に於ても、其の證跡あり、此等のソグド人の中には、思ふに又此の石城鎮に於るものと同じく、摩尼教を奉じたるもの少からざりしなるべし、されば突騎施の據りし地方を始め、其の他の中亞諸地方に在りし摩尼教徒のソグド人が、日常相接せるトルコ族の間に其の教を傳へ、若しくは傳へんとしたる可きは極め